

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21320009

研究課題名（和文） 心と行為の哲学的分析による倫理的諸概念の解明
—モラル・サイコロジーからの接近—研究課題名（英文） An Explication of Ethical Concepts by Philosophical Analysis of
Mind and Action: From the point of view of Moral Psychology

研究代表者

成田 和信（NARITA KAZUNOBU）

慶應義塾大学・商学部・教授

研究者番号：30198387

研究成果の概要（和文）：行為に関する心的事象と倫理学の諸概念や諸問題の関係が明らかにされた。とくに、次のような注目すべき成果を得た。(1) 後悔という道徳的心情と道徳的正当性の間には、従来は見落とされがちだった不一致がある。(2) 非難妥当性の根拠として、実践理性による選択の促進があげられる。(3) 信念が感情的側面をもつ。(4) ある種の過去の欲求が幸福に関する欲求実現説の反証になる。(5) 4の論点は、生前の欲求の死後における実現が幸福に貢献するかという問題と密接に関係する。

研究成果の概要（英文）：The following relations between mental states and events on the one hand, and ethical concepts and problems on the other hand have been made clear. (1) There is a discrepancy between regret and moral justification that has been overlooked. (2) Promotion of choices by practical reason can be a main reason for blameworthiness. (3) Beliefs have an emotional aspect. (4) A certain kind of past desires falsify the desire theory of happiness. (5) 4 is vital to the question of whether posthumous realization of a desire promotes happiness.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
年度			
総計	5,800,000	1,740,000	7,540,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：倫理学原論・各論

1. 研究開始当初の背景

倫理学は、人の行為にかかわる規範や価値を扱う。行為は、さまざまな心的事象の総合的な作用によって生まれる。したがって、倫理学の諸概念や諸問題を考えるにあたって、

人の行為にかかわる心的事象を研究することは欠かせない。このような理由により、行為にかかわる心的事象の哲学的分析を通じて倫理学における基本的な諸概念および諸問題の解明をめざすモラル・サイコロジーが、

近年、英語圏の倫理学の中で次第にひとつの学問領域として確固たる位置を獲得するようになった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近年、英語圏で倫理学の一分野として発展しつつあるモラル・サイコロジーの成果を検討しつつ、さらに、心の哲学や行為論で行われている哲学的分析のうちでモラル・サイコロジーと密接に関連するものにも目を配りながら、倫理学における基本的な諸概念および諸問題の新たな解明を試みることにある。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者・研究分担者から選んだ担当研究者を中心に、他の研究代表者・研究分担者、研究協力者、海外からの招聘研究者と意見交換しながら、モラル・サイコロジーの観点から、道徳的規範の实在性と規範的理由の存立条件、実践的推論と行為の合理性、自律、幸福（福利）、徳、という5つの問題群の解明に取り組む。さらに、その成果を、年数回開かれる研究集会において報告することで、より洗練された理論の構築をめざす。

4. 研究成果

研究代表者、研究分担者、研究協力者各自の研究ならびに、研究集会におけるその成果の発表、さらに、海外からの招聘研究者によるセミナーと相互意見交換を通じて、行為に関する心的事象と倫理学の諸概念や諸問題の関係が明らかにされた。とくに、以下の点を注目すべき成果としてあげることができる。

(1) 招聘した R. J. Wallace 教授（カリフォルニア大学・バークレー校）が行った一連の研究報告を受けて議論をした結果、後悔と道徳判断の間に以下のような関係があるこ

とが理解できた。過去の行為を道徳的に不正だとする判断には常に後悔がともなう、と通常は考えられてきた。この考え方に従えば、過去の行為に対する後悔がない場合には、その行為が道徳的に正当化されるという判断をともなうことになる。しかし、過去の行為を道徳的に不正だと判断しながら、それを後悔せずに良しとして肯定する場合がある。たとえば、扶養能力のない少女が悪いことだと知りながら出産しても、いったん子供が生まれたら、少女は子供を運んだことを後悔はせず、むしろ良かったと肯定するであろう。しかし、だからと言って、少女が過去の判断をかえて、子供を産んだことは道徳的に正しいかと思うとはかぎらない。このように、後悔と道徳判断の間に不一致が生ずる場合がある。この肯定は、道徳的な正当化ではなく、自分が選らんだ生き方に対するある種の肯定である。そして、その肯定は、われわれの生きがいを構成する重要な要素になることもある。しかし、今述べたように、そのように肯定されたものが、道徳的に正当化されたとは判断されないことがある。ここに人が抱えているある種の不条理がある。

(2) 非難妥当性 blameworthiness の道徳的根拠づけは、今まであまり試みられてこなかった。招聘研究者である Norman Dahl 氏（ミネソタ大学名誉教授）は、非難という行為のもつ効力、生き方の選択における実践理性の機能、さらにカントの定言命法の考え方を利用して、その根拠づけを行う研究をしている。その研究成果に関する報告と意見交換を通じて、次のことが明らかになった。道徳的に不正な行為は、人が実践理性によって自分の生き方を選択していくことの妨害になる。道徳的に不正な行為を行った人を非難することは、その人から距離を置き、その人に対し

て疎遠になる効果をもつ。この効果は、人が道徳的に不正な行為を行うことに対する抑止力となる。したがって、人々は、道徳的に不正な行為を行った人を非難すべきだという規則を、普遍的な規則として採用しようとする意志することが十分に考えられる。このように、道徳的に不正な行為に対して非難をすれば、人々が自分の実践理性を使いながら自分の生き方を選択することを促進できる、ということ、非難妥当性の根拠としてあげることができる。

(3) 招聘した Michael Slote 教授 (マイアミ大学) が行った一連の研究報告を受けて考察した結果、信念が動機付けの力をもっている理由として、信念が情緒的側面をもっていることがあげられる可能性があることが認識された。この認識から、実践的推論が成り立つのも、実践的推論を構成する信念が、その信念を実践的推論において使用するよう促すような情緒的側面をもっているからである、という説明の可能性が開けてくる。ただ、信念は「信念内容が世界に適合する」という適合の方向 *direction of fit* によって特徴づけられるが、このことが、信念の情緒的側面と矛盾しないのかという疑問が残る、したがって、信念の動機付けの力は、実践理性によって説明した方がよい、という可能性は残されている。この点は、今後の検討課題になる。

(4) 欲求の充足 (実現) 条件を考察することで、幸福に関する欲求実現説 (「欲求の実現が幸福を促進する」という説) への反論を形成できることがわかった。過去にはあったが現在は消滅している欲求がある、これを「過去の欲求」という。過去の欲求のうち、それが現在まで存続していることを条件と

する欲求がある。たとえば、「大学を卒業したら政治家になりたい」という過去の欲求は、ふつうは、「大学卒業したときに政治家になりたい」という欲求をまだもっていたら、政治家になりたい」という条件付きの欲求であることが多い。過去の欲求のうちには、それが現在まで存続していることを条件としない欲求もある。「将来も世界が平和であってほしい」という過去の欲求は、将来自分がそう思わなくとも実現してほしいと思っている欲求である。さて、後者の欲求、すなわち、それが現在まで存続していることを条件としない過去の欲求を現在において実現しても、幸福には貢献はしない。このことは、幸福に関する欲求充足 (実現) 説に対する反証になる。

ただ、「未来へのバイアス」(過去よりも未来を重んずるというバイアス) や「近さへのバイアス」(遠い未来よりも近い未来を重んずるというバイアス) と呼ばれている、われわれのもっている傾向性が合理性をもっているとすれば、このことに訴えることによって、以上の欲求充足 (実現) 説への反論がかわされるかもしれない。したがって、以上のような反論が成立することをさらに補強するためには、これらのバイアスの不合理性を説明することが必要になる。

(5) 4の論点は、生前の欲求が死後に実現することは、幸福を促進するかという問題を考えるうえで重要性を持つ。死後には生前の欲求が消滅しているわけであるから、死後に生前の欲求が実現することは、過去の欲求の実現とみなすことができる。したがって、4の論点をそのまま適用すれば、死後における生前の欲求の実現は、幸福に貢献しないことになる。ただ、死というものが間に存在することが、生前の欲求の死後の実現に4の論

点をそのまま適用することの妥当性を左右するかもしれない、この点の検討は今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 16 件)

①成田和信、快楽主義の新たな試みと人生満足説、倫理学年報 (日本倫理学会)、査読無、61 号、2012、16-24

②エアトル・ヴォルフガング、Getting It Wrong? An Overview of the Central Arguments for Mackie's Error Theory, Series of Advanced Research of Logic and Sensibility、査読無、4号、2012、383-391

③成田和信、快さと楽しさ、慶應義塾大学日吉人文紀要、査読無、25 号、2010、1-29

④河野哲也、道徳的な普遍化要請の起源：共感の拡張について、立教社会福祉研究、査読無、13 号、2011、11-19

⑤柏端達也、継承と拡散 —— 「形而上学」は再興するか、哲學 (日本哲学会)、査読無、61 号、2011、53-67

⑥福間聡、道徳に実在論は必要か —— 非自然主義的実在論に基づいて一、『理想』、査読無、685 号、2011、85-98

⑦柏端達也、特集「性質の形而上学と因果性」に向けて、『科学基礎論研究』(科学基礎論学会)、査読無、112 号、2009、27-28

⑧福間聡「死者に鞭打つ」ことは可能かー死者に対する危害に関する一考察『死生学研究』、査読有、12 号、2009、129-149

[学会発表] (計 21 件)

①河野哲也、心理学における記憶と人格の概念、日本科学哲学会第 44 回大会ワークショップ『記憶とは何か：記憶概念の再検討』、2011 年 11 月 20 日、日本大学文理学部

②成田和信、幸福に関する快楽主義、日本倫理学会第62回大会共通課題シンポジウム『幸福』、2011年10月2日、富山大学

③河野哲也、自他分離の発達：哲学的観点から、第75回日本心理学会大会、ワークショップ『鏡の向こうのあなたはわたし?』、2011年9月16日、日本大学文理学部

④河野哲也、Biosemiotics as a New Ontology for Psychology、14th Biennial Conference of the International Society for Theoretical Psychology、2011年6月28日、Aristotle University of Thessalonik, Greece.

⑤柏端達也、時間の非対称性と価値や幸福の

問題、日本時間学会シンポジウム「時間体験の基礎——心理学、生物学、哲学からのアプローチ」、2011年6月11日、山口大学

⑥成田和信、欲求実現と時間、日本イギリス哲学会第86回関東部会、2010年12月11日、慶應義塾大学三田キャンパス

⑦河野哲也、Religion, Morality, and Brain、The 5th International Conference on Applied Ethics、2010年11月6日、北海道大学

⑧エアトル・ヴォルフガング、Nothing but Representations - A Suarezian Way out of the Mind? XIth International Kant Congress、2010年5月26日、Pisa (Italy)

⑨柏端達也、共同討議 I：形而上学再考、日本哲学会第69回大分大会、2010年5月16日、大分大学

⑩福間聡、「死は恐ろしい」は真か、東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOEシンポジウム「死生学と生存学」、2009年9月6日、東京大学本郷キャンパス

⑪柏端達也、不幸 (あるいは幸せ) の帰属に関する一般理論と時間的非対称性の問題、応用哲学会第1回大会、2009年4月25日、京都大学

⑫エアトル・ヴォルフガング、History and Nature of Transcendental Philosophy、British Society for the History of Philosophy Annual Conference、2009年4月17日、Manchester UK

[図書] (計 6 件)

①河野哲也、他、玉川大学出版部、科学技術倫理学の展開、2009、190

6. 研究組織

(1) 研究代表者

成田 和信 (NARITA KAZUNOBU)

慶應義塾大学・商学部・教授

研究者番号：30198387

(2) 研究分担者

河野 哲也 (KONO TETSUYA)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：60384715

柏端 達也 (KASHIWABATA TATSUYA)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：80263193

エアトル ヴォルフガング (WOLFGANG ERTL)

慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号：30407150

福間 聡 (FUKUMA SATOSHI)

東京大学・人文社会系研究科・特任研究員

研究者番号：40455762